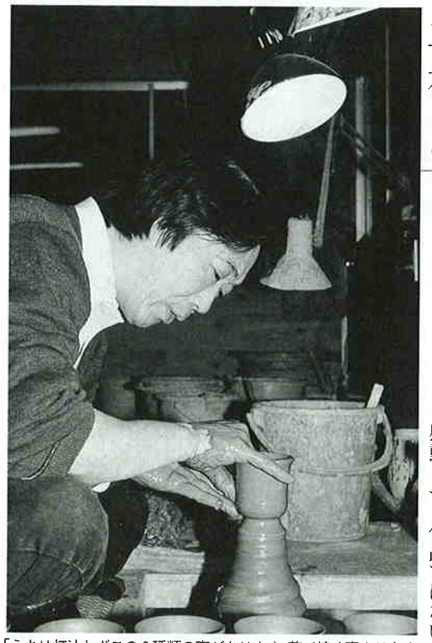
土に勢いがあるうちに作り
祈りを込めて焼きます
よい仕上がりだととても幸せです

植松　隆さん
（陶芸家）


「うちは灯油とガスの２種類の窯があります。薪で焼く窯よりもより計算どおりに仕上がりますが、それでもやはり窯を開けるときにはドキドキ、ワクワクしますね。一番楽しみな瞬間です。」
（息がつまるような緊張感が漂う制作風景）

ろくろや乾燥中の作品などの並ぶ作業場をぬけ、2階に上がるとそこは山小屋風の暖かみのあるギャラリーになっていました。植松さんの独特な作風である、線を利用した幾何学的な壺や皿が並び、外の木々からこぼれる太陽光線がブラインドを通して不思議な陰影をつけています。

ここは「陶房入間野」。堀兼の畑の奥にある、植松さんの城です。植松さんが狭山で窯を開いたのは今から22年程前。ご自身の制作活動の傍ら、陶芸教室も開いています。植松さんが教えるのは、技術的なこともさることながら「陶芸の楽しさ」が一番だと言います。県展などの審査員も務める植松さんが他人の作品を見たり指導するときに注意するのは、「オリジナリティがあるかどうか」ということです。何かの真似をしているものは、どんなに技術的に上手でも人を感動させる作品ではないのだそうです。「作者がどれ程一生懸命に、ひたむきにその作品に向かいあっているか。生き生きとした感性を受け止め、引き出してあげたいんです。」とおっしゃいます。そんな植松さんが制作のときに心掛けているのは、「陶器は使うことを目的に作るものですから、使い勝手のよさを研究しなければなりません。どんなに恰好がよくても、飾っておくだけの物ではだめです。だから使う人の好みや使用方法などを聞いて作ることもあります。また、私自身も料理や酒、お茶などの作法や心意気などを積極的に学んでいますし、その使い勝手を考えたうえで自分の探究心を満足させるような作品が理想だと思います。」とのこと。お言葉どおり、その作品はどれも実用的で、かつ植松さんらしさが表れたものばかりです。「仕事って、義務感では務まらないですね。好きでなきゃ。私は一生この仕事をしていきたいです。」静かだけれどひたむきな眼で答えてくださいました。

「陶器のよさをもっとたくさんの人に知ってもらいたいですね。そのために、住居や生活様式の変化なども常に意識して制作しています。」

私の意見

ごみの減量、分別について

入間川在住　萩原徳太郎さん

行政側がいくらごみ減量を叫んでも、実際にごみを減らせるのは個人個人のお宅です。

毎回毎回集積所に山積みで出されるごみ袋。ごみを減らす努力、出し方は万全でしょうか。出したごみを一度振り返って見てください。中にはダンボールや新聞紙、ボロ布など、リサイクルできるものがたくさん混じっているのではないでしょうか。また、燃やさないごみの中には、紙類が混じっていませんか。ごみを減らすために一番必要なのは各人が考え、行動することです。世間を騒がせているダイオキシン問題にしても、自分が出した燃やすごみの中にはプラスチック類が混ざっていませんか。

分別の徹底、意識の向上を個人個人が心掛け、本当のリサイクル都市狭山を目指そうではありませんか。

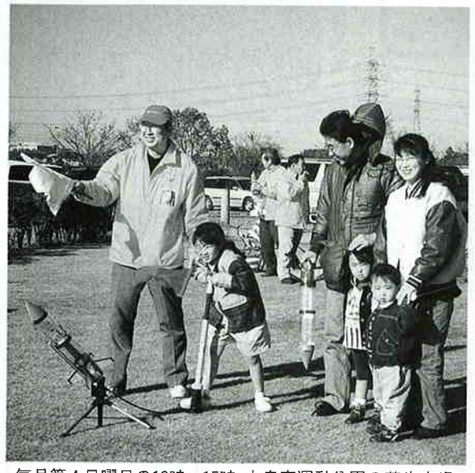
（「市長への手紙」から）

天高く飛んでけ
ぼくのペットボトルロケット
「３・２・１、打ち上げ!!」

REPORTER'S EYE

【リポーター】
中島　実千代さん（東三ツ木在住）

リポーターズアイでは、行政のしくみや話題性のあることがら、市内のいろいろな施設などを、市民のかたがリポートします。


毎月第４日曜日の13時～15時、上奥富運動公園の芝生広場で活動しています。ぜひ参加してみてください
問い合わせ：日本ペットボトルクラフト協会事務局
入間川1－24－48／☎69－1710

ペットボトルロケットは夢と希望とともに大空へ・・・

皆さんはペットボトルロケットをご存じでしょうか。狭山市が発祥の地としてテレビや新聞、ラジオなどでも放送されたので、実際に見たことがなくても、どんなものかお分かりになるのではないでしょうか。今回はペットボトルロケットを生み出し、「自然科学と遊びの大切さ」を教えてくれる「日本ペットボトルクラフト協会」をご紹介します。

私がこの競技と出会ったのは、小学3年生だった息子が児童館の「親子ペットボトルロケット教室」のチラシを持ち帰ったことがきっかけでした。ぜひ参加したいという息子と一緒にでかけ、初めて作ったペットボトルロケット。私たちは飛ぶ原理や入れる水と空気の量の理由が分からず、「なぜ？どうして？」と質問ぜめの参加でした。

その後私たち親子は、水や空気の量、羽根の形や大きさによる飛距離の違いなどを調べ、思いがけずその研究が、ある賞をいただけたのです。ただ、賞とは関係なく、共に研究したことで親子関係がよりよいものになりましたし、一生大切にしたい思い出ができました。今では家族全員がこの競技に夢中で、大会に出場しては工夫を重ねています。

ペットボトルロケットの魅力はひと言では言い表すことができませんが、まず爽快感でしょうか。人間は自分の力で空を飛ぶことができませんが、自分の分身とも言えるようなロケットが大空に勢いよく飛び出していきます。その瞬間は何ものにも代え難く、ぜひもっとたくさんの人に知ってもらいたいと思います。また、協会ではロケットだけでなくソリやパラシュートも開発中です。このパラシュートは、まるで空に色とりどりの花が咲くようで、イベントの開会式などの時にも最適です。ロケットの原理を利用した遊びがこんなにたくさんあり、しかも廃品や手軽に購入できる部品だけでできるなんて、本当に驚きますね。部品が全てキットとして箱に入っているようなおもちゃは、一つが欠けただけで完成しなくなるし、誰が作っても同じ物しかできません。しかしペットボトルを利用したこの遊びは、自分で創意工夫をして、世界に一つしかない作品が出来るのです。これもこのロケットの大きな魅力です。

西武球場で開催された打ち上げ披露では、ライオンズの選手人形のパラシュートも登場しました

ペットボトルロケットは、サッカーのグラウンドよりも広い場所が必要な競技です。ですから、協会のかたもおっしゃっていましたが「広くて周囲に道路や家などがないコートがほしい」というのが、熱心なプレイヤーとしての願いです。これからも日本ペットボトルクラフト協会が、ロケットのように世界に向けて大きく飛び上がり、たくさんの人に夢と希望を与えられるよう、発展していくといいですね。

大人も子どもも一緒に、夢中になれるのがこの競技のよさです